

令和七年度

滝川第二中学校 プレテスト 問題

国語

(五十分・百五十点)

注意事項

- 1 問題は1ページから14ページまであります。
- 2 解答は、すべて解答用紙の枠内わくないに記入しなさい。
- 3 「開始」の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 4 受験番号と氏名を、解答用紙と問題冊子の表紙に正しく記入しなさい。
- 5 「終了」の合図で筆記用具を置き、監督かんとくの先生の指示に従いなさい。

受験番号							氏名
		—					

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(指定された字数には、句読点その他の符号もそれぞれ一字としてふくみます。)

唐突ですがここで一つ質問。「職業」について深く考えた作家という、誰が思い浮かびます？ 意外なことに答えは①夏目漱石です。

漱石といえ、人間の内面とその※葛藤を描いた作家ですね。

※形而上的なテーマに終始こだわった作家だから、職業Ⅱ生業(なりわい)という日銭にかかわるような、いわば※下世話には関心などなかっただろう、と思われがちです。(A)彼は「道楽と職業」という演題で、全国各地で堂々と講演を行っているのです。「大学に職業学という講座を設けてはどうかということ考えた事がある」(『私の個人主義』講談社学術文庫)とも述べています。職業というものがどのように発展するかを研究し、その「進化の原則」を探求すべきだと、本気で主張していました。

というのも当時の若者の多くが、自分の進路について思い悩んでいたからです。②ことに帝国大学出の学生は就職難に苦労しました。エリートなのに不思議ですね。

明治政府は西洋の近代的な文化、科学を採り入れるため、人材の育成に力を入れました。しかし西洋的知識を手にして大学を卒業しても、その就職先は政府や学校などかぎられていたもので、仕事にありつけずブラブラするしかないという人も多かったわけです。エリートはたくさん出てきたが、その受け皿となる民間企業がまだ育っていなかったのです。

そこで漱石が考えたのは、③職業というものをまずしっかりと定義づけることでした。それを簡単にまとめると「仕事というのは他人のためになすもの、すなわち『他人本位』の行為だ。一方で芸術や科学研究に携わる仕事は『自己本位』である」となります。漱石は職業をこのように規定しました。

しかしこの図式的な二分法はあまり重要ではありません。むしろポイントは「本位」という言葉です。他人のためにしろ、自分のためにしろ、それを「本位」という生きる「指針」、すなわち職業を「生き方」としてとらえた点が重要なのです。つまり個々人の「人生」の中に、職業を重要な活動として明確に位置づけたところが画期的だった。漱石は職業こそ近代社会と個人を結ぶ基本原理であると見抜いていたのでした。

もう少し分かりやすく説明しましょう。仕事は人生と大きく

関わるというのは、現代人にとってはふつうの感覚ですが、④江戸期の士農工商の身分制度があった時代の人々にとっては違います。生まれたときからすでに将来の生業がわりふられているわけです。当時の人には、親と同じレールの上を進むという感覚がふつうだったでしょう。自分の進路にあれこれ悩む機会もありませんでした。仕事を選択し、将来を自分で切り開いていくという人生観は、まだ存在しなかったのです。

明治になって人々は、古い身分制度の束縛から解放され、働く自由を獲得しました。このとき近代的な職業観が生まれます。つまり職業が「誕生」したのです。しかしそれは同時に、身分に合わせてあらかじめ敷かれていたレールがなくなり、自力で人生の道筋をつけていかなければならなくなったということ。職業の誕生が、人々に「自分で築く人生」を強く自覚させたのです。そこに不安や葛藤が起こってくるのは当然ですね。

(B) 二二世紀の今はどうなのでしょう。実は現在の日本は、漱石の時代と同じように職業の大変動期を迎えている。やがて職業という概念、人々の人生観さえ一新されるだろう、と私は考えています。

そう気づいたきっかけは、※リタイヤした※シニアの暮らし

について調べたことでした。⑤定年後のシニアの中には、毎日の生活に張りあいがなく、生きがいも感じないという人が少なくないのです。しかしこれは当たり前ですね。漱石が※喝破したように、仕事は個人と社会とのつながりを保つもので、定年でそれを失うことは社会的な孤立をまねきやすいのです。「自分本位」で※孤高の人生を楽しむことができる人は別として、多くのシニアが「何かしなければ」という※焦燥の日々をおくっています。働きたい、あるいは社会活動に精を出したいという人は多いのですが、では実際にをするのかといったら、なかなか答えをだせないのです。

「働くこと」について悩み、苦しみ、奮闘しているのはシニアだけではありません。実は若い世代もそうなのです。その背景には、かつて一般的だった企業の※終身雇用が、過去のものになりつつあることがあります。将来も安泰だと見られていた多くの大企業が海外資本に「身売り」されたり、規模を縮小している現実も無視できません。

しかしもっとも大きい要因は、デジタルネットワークの普及で働き方が大きく変わりつつあること。仕事ばかりか、個人と個人の関係にも根本的な変化が起こっています。さらに仕事に

AIが導入され、これから消える職業や、あらたに生まれる職業が出てきそうです。こうした中で、これまでの職業観、生き方が通用しなくなっているのです。

それは⑥いささか大げさではないか、という反論も聞こえてきそうです。では最近、こういう話をよく耳にしませんか？

（C）第一志望の有名企業に入社できたのに転職先も決めないまま、ほんの一、二年でやめてしまおうとか、大企業を飛びだし技術やアイデア一つ携えて仲間と起業する。あるいは社会人になったにもかかわらずいきなり留学したり、専門技能を習得するために再び勉強を始めた。こんな冒険的（ぼうけんてき）でちよつと※無謀（ぼうぼう）に感じられる若者の転身話が、私の周囲にも当たり前のよう

にころがつています。

最近（さいきん）は農業を志向する若い人たちがたくさん出てきました。ある農業法人には、わずかな大卒採用枠（わく）に約四〇〇〇人の若者が押しよせたと話題になりました。若者（わかしよ）だけではありません。

各地の農業ボランティアには若い世代に混じって多くのシニア層（きんこう）もつめかけます。関東（かんとう）の※近郊（きんこう）農業は、こういう人（ひと）たちを抜きに成（な）りたない地域（ちいき）も出てきています。戦後（せんご）一貫（いっかん）して、農業は衰退（すいたい）する遅（おそ）れた産業（さんぎょう）だと見（み）られてきましたが、今（いま）や

X 職業

業（ぎょう）だと思（おも）える人（ひと）が増（ぞう）えています。これも最近（さいきん）、人々（ひとびと）の職業観（しごくかん）に起こった変化（へんか）の一例（いれい）です。

しかしこれら（これら）の現象（げんしょう）は、新しい時代（じだい）の予兆（よしょう）にすぎません。ではその新しい時代（じだい）では、どんな風景（ふうけい）が展開（しんぱん）されるのでしょうか。

その一端（いったん）を紹介（しょうかい）すると、まず基本（きほん）となるのが人（ひと）と人（ひと）との関係（かんけい）の変化（へんか）です。仕事（しごと）でも暮（く）らしでも、上下（じやうげ）（タテ）の関係（かんけい）より、対等（たいとう）（ヨコ）の関係（かんけい）が重視（じゅうし）されるようになります。タテにこだわる古い体質（たいしつ）の企業（きぎょう）は会計（かいけい）や製品（せいひん）検査（けんさ）で不正（ふせい）が発覚（はつさく）したり、新しい波（なみ）に乗り遅（おそ）れ衰退（すいたい）しがちですが、ヨコ（ヨコ）の関係を機軸（きじく）にする新しい組織（そくし）には活気（かつき）があります。個人生活（こじんせいふく）もヨコ（ヨコ）のつながり（つながり）を大切（たいせつ）にする人（ひと）は豊かな交友（こうゆう）関係を築（きず）いていますね。

ヨコの関係（かんけい）とは⑦人（ひと）のネットワーク（ネットワーク）のこと（こと）です。この水平的（へい平的）なつながり（つながり）を利用しての起業（きぎん）、組織（そくし）からの※スピニアウト（spina-out）が活発（かつぱつ）化（か）しています。ボランティア（volunteer）などの社会（しやかい）活動（かつどう）もネットワーク（ネットワーク）で広（ひろ）がっています。

漱石（しゆせき）が考（かん）えたように、職業（しごく）とはその人（ひと）の本位（ほんゐ）（生き方（いきかた））を決定（けつてい）づけるもの（もの）。生き方（いきかた）と職業（しごく）はしつかり接（け）続（ぞく）されている。職業観（しごくかん）が変（へ）わることは、生き方（いきかた）が変（へ）わるというこ（こと）。私は新（あたら）しい時代（じだい）にふさわしい「働（はたら）き方（かた）」、「生（い）き方（かた）」とはどんなもの（もの）か、考（かん）えを

ぐらしているところです。未来はすぐそこです。

(藤原智美「漱石が見抜いた『職業』の本質」より。)

注 葛藤：心の中に相反する感情があり、そのいずれをとるか迷

うこと。

形而上：具体的な形をもっていないもの。

下世話：世間で人々がよく口にすることば。

リタイヤ：退職すること。

シニア：高齢者。

喝破：誤った説を正して、事実を説き明かすこと。

孤高：俗世間とは離れて、自らの志を守って行動する様子。

焦燥：あせること。

終身雇用：同一の企業で定年まで雇用され続けるという、日

本の正社員雇用における慣習。

無謀：結果に対して深い考えがないこと。

近郊農業：大都市の周辺で行われる農業。

スピンアウト：企業が子会社や事業を新たな会社として独立

させること。

問一 (A) (C) に入ることばとして適当なものを、

次のア～オから選び、記号で答えなさい。(同じものは二度選
べません。)

ア たとえば イ そして ウ では

エ しかし オ それゆえ

問二 — 線部①「夏目漱石」の作品として最も適当なものを、次

の ア～エ から選び、記号で答えなさい。

ア 『破戒』 イ 『蜘蛛の糸』

ウ 『草枕』 エ 『走れメロス』

問三 — 線部②「ことに帝国大学出の学生は就職難に苦労しま

した」とありますが、その理由について説明した次の文の

【 】 に入ることばを、【ア】は五字、【イ】は四

字で本文中から書きぬきなさい。

【ア】を習得したたくさんのエリートを受け入れる

【イ】がまだ成長していなかったから。

問四 ——— 線部③「職業というものをまずしっかりと定義づけることでした」とありますが、夏目漱石の定義について説明した次の文の【 】に入ることばを、本文中のことばを使つて、三十五字以内で書きなさい。

ほとんどの仕事は他人のためにする「他人本位」の行為であるが、【 】である。

問五 ——— 線部④「江戸期」の人々の生活や考え方についての説明として誤っているものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 身分制度によって、生まれたときから将来するべき仕事が決められていた。

イ 親と同じ生き方をするのがふつうだという感覚を持っていた。

ウ 自分の進路について悩む機会を持つことはほとんどなかった。

エ 仕事を選択して、将来を自分で切り開いていこうと考えた人は少数だった。

問六 ——— 線部⑤「定年後のシニア」が社会的に孤立することが多くなる理由を説明した次の文の【 】に入ることばを、本文中のことばを使つて、二十字以内で書きなさい。

定年で仕事を失うことによって、【 】から。

問七 ——— 線部⑥「いささか」の意味として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア ほんの少し

イ あまりにも

ウ かなり

エ もしかすると

問八 X に入ることばとして最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 最先端さいせんたんで時代をリードする

イ リスクは高いが見返りの大きい

ウ 堅実けんじつでやりがいのある

エ 危険だが挑戦ちようせんしがいのある

問九 ――線部⑦「人のネットワーク」と同じほぼ意味をもつことばを、本文中から八字で書きぬきなさい。

問十 次のア、エのうち、本文の内容に合うものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 夏目漱石が提案した二分法は人生と職業を考える上でも重要なもので、現在の仕事の考え方にも強い影響^{えいきょう}をあたえている。

イ 明治時代になって、古い身分制度から解放された人々は「自分で築く人生」を自覚して、同時に不安や葛藤を感じるようになった。

ウ 終身雇用が過去のものになりつつあり、多くの大企業が規模を縮小するなどの現実があるが、若い人たちはそのことを少しも気にかけていない。

エ アイデア一つだけで仲間と起業したり、社会人になったにもかかわらずいきなり留学したりする無謀な若者は必ず失敗する。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(指定された字数には、句読点その他の符号もそれぞれ一字としてふくみます。)

中学2年の藤念真子はあることをきっかけに画家である夏鈴さんの住む「イカル荘」でホームステイをしている。ホームステイの最終日、バードウォッチングを楽しむ人々の集まりである「探鳥会」に参加する。

「真子ちゃんが今見たのは、『タカ渡り』っていうんだ」

「タカ渡り？」

「そう。一年に一度、九月の末から十月のはじめのこの時期に、遠い国へ旅立っていくタカの群れを、みんなで観察してるんだ。

※リーダーたちは、渡るタカの数や、飛んでいく方向なんかのデータを取ってるんだけどな。今日の探鳥会の目的はこれさ。

タカとひとくくりに言ってるけれど、サシバっていつて、ワシ・タカ類の仲間のことだ。こんなにくさんのワシ・タカ類を見ることがするのは、①この時期しかないんだ。普通の観察会

では、そうだな、一日にワシ・タカ類、二羽か三羽、見られればいいほうなんだ」

「へえ。②このタカたち、どこに行くんですか？」と、真剣な口調で真子はたずねた。

「熱帯の国だな。日本の冬は寒くなると、餌になるバツタなんかが急激に(A)いなくなるだろ。だから暑い国へと、今見たみたいにな、いっせいに渡っていくんだ。行き先はインドネシアだって聞いたことがある」

「インドネシア？」

真子は※デフィンの姿を探した。

「遠くまで行くんですね」

「一気に飛んでいくわけじゃないさ。日本列島のいろんな地域で暮らしていたタカが、集まってくる地点、ま、集場所みたいな地点があるんだけど、そこから、気流の流れを読みながら、どのくらいだっけかな、最終地点まで渡っていくんだ」

「一万キロだよ」

※颯太が答える。

「一万キロ……」

真子は空を見あげた。

「あの、③タカ柱って……」

※ジジさんは、人差し指を空中で動かしながら教えてくれた。

じょうしょう

「タカはな、上昇気流を利用して、まず上空にあがっていく。そこで、空気の流れ、えっと、自分たちが行きたい方向へと流れている気流をつかまえて、より遠くのところまで飛んでいく。そこで一休みして、また、上昇気流をつかまえて上昇し、さらに遠くのところへと飛んでいく。それを何度もくり返していくんだ。それが、タカが渡る方法だ。上昇気流のあがる場所は、それほど多くないから、近くにいたタカたちがみんなその上昇気流で上空にあがろうとして、次々に集まってくる。それが一本の柱のようになる。それをタカ柱って言ってるんだ」

「タカ柱……。大黒柱とずいぶん違う」と、真子がつぶやく。

「そりや、タカが作る柱なんだから違うに決まってるんだろ」と、颯太に大口をあげて笑われた。笑顔のまま颯太は目を空に向けた。

「いつ、どこで、タカ柱が立つのか、人には全く読めん。天気なのか、風向きなのか、気温、湿度のせいなのかわからん。タカの渡るルートはだいたいわかってきたらしいけどな。タカには、上昇気流や空気の流れなんかが、人で言うところの高速道路みたいに、くつきりと見えてるのかもしれないねえな」

またリーダーの声があがった。

「北西、十一時方向、あれ、カラスか？」

颯太がすぐに双眼鏡を構える。

【 I 】

颯太が興奮した声をあげた。

「確認。カラスにつつかれてる。ドジだな。カラスのテリトリーに入っちゃったんだ。まだ若鳥だな？ 早く逃げろよ！」と、リーダーが声をあげた。

颯太が小走りでよく見える場所へと移動していく。真子は颯太を追いかけて、そこで双眼鏡を構えた。その視界の中に見える点、それがカラスだと教えられる。わらわらと羽ばたいているカラスの群れの中から、（B）すべるように抜けだしてくる一羽のタカ。明らかにカラスとは違う姿・形。それがサシバだという。まっすぐこちらに向かってくる。

【 II 】

息をつめて、双眼鏡の中を真子にはらむ。

「あ、消えた」

真子は左右に双眼鏡をずらす。カラスはわらわらと飛んでいるのだけれど、こちらに向かってきているはずのサシバの姿が見えなくなってしまった。

（C）してしまった。観察している人たちも、見失ったサシバを探して、双眼鏡を忙しく動かしている。

【 III 】

残念そうな声があがり、真子は双眼鏡をおろした。

「今飛んだのって、サシバの若鳥なの？」と、横にいる颯太に声をかけた。

「うん。サシバって、日本で繁殖するんだ。今年、卵から孵って、はじめて渡りをしようとしている若鳥だよ」

「へえ。その若鳥って、親鳥や大人のサシバに守られて渡りをするんでしょ？」

颯太がふふと軽く笑った。

「ないない。それは人間の思う、④甘い幻想ってやつだな。サシバの若鳥はたった一羽で一万キロを旅するのさ。親鳥は親鳥で必死だから、子どもにかかわってたら渡れない」

「え、そうなの」

真子は心の中でひどくがっかりしてしまった。親や親戚が集まり、若鳥を守りながら、渡りという苦難に立ち向かっていくのかと、わからないながらも想像していた。それを思いっきり否定されてしまった。

「藤念も、若鳥を守りながら渡る美しい親子愛、なんて期待してたんだろう。鳥は巣立ったらもう一人前だ。だれも助けてくれない」

颯太はきっぱりと言いきった。

「そ、そんなこと、ない、っていうか、それほど、サシバのこと知らないもん」

「サシバの気持ちなんて、人間のおれらにはわからないと思う。気持ちというものがサシバにあるかどうかもわからないもん。人間の思いをサシバにかぶせるのは勝手だけど、きつと、違うと思う。⑤ たった一羽で渡っていくのはかわいそうだと思うても、サシバにとっては当たり前のことなんだ。普通のことなんだよ。たとえ命がけでもな」

颯太が両手で双眼鏡を握った。

「そんなこと言ったって、おれも、一羽で旅立つサシバが、すげえかつこいと勝手に思っただけだな」

真子の心がしんとしてしまった。

渡りをするサシバのひとり立ち、それは一羽で、命がけで遠くの国へと渡っていくことだと言う颯太の声が耳に残った。
（群れていても、一羽なんだ）

真子は再び空に目をやった。

真子が目をもどすと、颯太があらぬ方向を見て口を半開きにしていた。そばの人たちも、あっけにとられた表情を浮かべて、颯太と同じ方向を見つめている。

ジジさんが、颯太の肩をたたいた。(D) した颯太がカメラを構えた。

一 IV 一

ジジさんのささやく声が、はっきりと聞こえた。

真子も見た。

すぐそばのスギの木立ちの間から、ふわりと一羽のサシバの若鳥が現れたのだ。

双眼鏡ごしじゃない。肉眼ではっきりとサシバの姿が見えるのだ。

見開かれた真つ黒な目はまん丸で、射抜くような視線は、見たこともないほど鋭い光を放っている。くちばしはナイフのように研ぎ澄まされ、翼を広げて飛ぶ姿は思ったより大きくて、堂々としている。尾羽根を力いっぱい広げて、獲物を狙っているような緊張感が体全体から伝わってくる。それは他の鳥にはない威厳であり、迫力だった。サシバの特徴もよくわからない

真子だ。でも、ハトや、スズメ、そして※イカルとは明らかに違っているのがよくわかる。精悍な姿をしたサシバが、すぐ目の前を飛んでいる。

(か、かっこいい！)

鳥肌がたち、心を一気に持っていかれた。

サシバの若鳥が、あずま屋のすぐ上空を回りはじめた。肉眼で追っていた真子のはつとした。⑥ そのサシバの右の翼、その羽根が一本、空を向いて立っているのだ。ほかの羽根とは逆方向、上を向いてぴんと立っている。

颯太の声がした。

「あいつ、羽根が折れてる。手負いだな。さっきのカラスにやられたんだ」

羽根が折れたサシバが目の前を飛んでいる。真子の脳裏に、そのサシバの姿がくっきりと焼きついた。

そのときだった。

——ピーックルー

一 V 一

サシバの若鳥を驚かせないように、さざ波のようにざわめきがあがった。

「すげえ。サシバの鳴き声、おれ、はじめて聞いた」

必死で興奮を静めようとしている颯太の声が震えている。颯太は、カメラを食べてしまいそうなほど前のめりになって、ピーックルーと鳴いたサシバをカメラで追いはじめた。シャッター音が立て続けにあたりに響いた。

手が届きそうなところを、サシバの若鳥がふうわりと飛んでいく。一本の折れた羽根を上突き立て、また鳴いた。

——ピーックルー

ひどく悲しげに聞こえた。その突き刺すような鋭い鳴き声が真子の胸にささった。

（サシバの若鳥がカラスにつつかれて羽根を折り、ピーックルーって、鳴いてる）

真子の中で「鳴く」の文字が「X」へと変換された。

（カラスに追われて怖かっただろうな。羽根を折られて痛くなかったのかな。それでも、渡らなくちゃいけない、飛んでいかなくちゃいけないんだ。たった一羽で……）

⑦ 真子の中で、けなげなサシバの若鳥の物語が完全にできあがっていた。

（にしぎきようこ「イカル荘へようこそ」より。）

注 リーダー：「探鳥会」のリーダー。

デフィン：インドネシアからの留学生。

颯太：夏鈴さんの甥で真子の同級生。

ジジさん：イカル荘の隣に住む夏鈴さんの父親。

イカル：鳥の名前。

問一 （A）（D）に入ることばとして適当なものを、

次のア～カから選び、記号で答えなさい。（同じものは二度選べません。）

ア	しんと	イ	そつと	ウ	スーッと
エ	ギュッと	オ	はつと	カ	パタッと

問二 ——線部①「この時期」とはいつのことですか。本文中から

十二字で書きぬきなさい。

問三 ———線部②「このタカたち、どこに行くんですか？」とあり

ますが、その答えについて説明した次の文の【 】に入る
ことばを、本文中からそれぞれ四字で書きぬきなさい。

日本列島のいろいろな場所で暮らしていたタカたちが集ま
る【ア】から気流の流れを読みながら、一万キロ渡って、
【イ】である熱帯のインドネシアまで行く。

問四 ———線部③「タカ柱」の説明として誤っているものを、次の

ア、イから選び、記号で答えなさい。

ア タカは上空に上がり、自分たちが行きたい方向へ流れて
いる気流をつかまえる。

イ 上昇気流のあがる場所は少ないので、近くにいるタカが
たくさん集まってくる。

ウ タカ柱がいつ、どこで立つのかを知ることが不可能で、
タカの渡るルートも解明できていない部分が多い。

エ タカは上昇気流をつかまえて上昇することを何度も繰り返す。

問五 【I】 【V】に入る会話文として適当なものを、

次のア、オから選び、記号で答えなさい。

ア 「見失っちゃった」

イ 「さっき、カラスに追われていたサシバの若鳥だ」

ウ 「わ、サシバが鳴いた！」

エ 「ん？ カラスに追われて、一羽、なんだろう？ お、サ

シバだ！」

オ 「逃げてくる」

問六 ———線部④「甘い幻想」とはどのような考えですか。それに

ついて説明した次の文の【 】に入ることばを、本文中の
ことばを使って、四十五字以内で書きなさい。

今年、卵から孵って【 】という考え。

問七 ———線部⑤「たった一羽で渡っていく」とほぼ同じ意味を

表すことばを、本文中から六字で書きぬきなさい。

問八 — 線部⑥「そのサシバの右の翼、その羽根が一本、空を向いて立っている」とありますが、これはどうしてですか。本文中のことばを使って、二十五字以内で書きなさい。

問九 ☐X に入ることばを考えて、二字で書きなさい。

問十 — 線部⑦「真子の中で、けなげなサシバの若鳥の物語が完全にできあがっていた」とありますが、このときの真子の気持ちの説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア けがをして苦しんでいる若鳥を見ているのに、興奮してカメラで追いかけている颯太に対してあきれている。

イ サシバの鳴き声を初めて聞くことができたことがうれしくて、今この場所にいることを喜んでいる。

ウ ひどい目にあっても、ひとりで遠くまで飛んでいかなければならないサシバの若鳥のことを考えて絶望している。

エ 今後いろいろとつらいことがあるだろうが、必死でがんばっているサシバの若鳥の姿に感動している。

三 次のそれぞれの文の ☐ に入る体の部分を表す漢字を答えなさい。

(1) 妹はニューヨークで働いている兄の帰りを先週から ☐ を長くして待っている。

(2) ☐ が早い山口くんは、川野さんが転校することをもう知っていた。

(3) あのおじいさんは、そのネコのことを ☐ の中に入れても痛くないほどかわいがっている。

(4) 高野さんは他人のことはよく話すが、家族のことになると ☐ が重い。

(5) 人の ☐ もとを見てはいけません。

四 次の各問いに答えなさい。

(1) 次の文の——線部の語と同じ種類・使われ方のものを、そ

れぞれ後のア、エから選び、記号で答えなさい。

① 両親からほめられる。

ア 先生が教室に来られる。

イ もう少しは食べられる。

ウ 病気の母のことが案じられる。

エ 部屋に入るところを見られる。

② ありがたくいただきます。

ア どうぞめしあがってください。

イ 明日の朝、うかがいます。

ウ もうすぐ夏休みが来ます。

エ 市長がお話しになる。

③ あの人は話の上手な人だ。

ア この部屋は静かだ。

イ すずしい風が吹いている。

ウ 明日が暑くなるようなら、家にいる。

エ 昨日はとても楽しかった。

(2) 次のそれぞれの熟語と成り立ちが同じものを、それぞれ後のア、オから選び、記号で答えなさい。

① 父母 ② 生活 ③ 新年 ④ 読書 ⑤ 頭痛

ア 曲線 イ 海洋 ウ 異同 エ 民営 オ 加熱

五 次の——線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して

書きなさい。

(1) 流行に便乗する。

(2) 明日の朝までにできあがったものを納品する。

(3) 本に批評を書く。

(4) 誠意をつくして対応する。

(5) あの人は博学です。

(6) タンニンの先生に宿題を提出する。

(7) ヤコウのバスで東京に向かう。

(8) 近くにいる祖父の家をハウモンする。

(9) 各家庭にチラシをハイフする。

(10) 外出のキョカが出る。

